

静岡市埋蔵文化財調査報告

曲 金 北 遺 跡

第 13 次発掘調査報告書

2 0 0 9

静岡市教育委員会

例 言

1. 本書は集合住宅建設に伴い、平成 19 年 9 月 25 日から平成 19 年 11 月 21 日まで実施した、静岡市駿河区曲金六丁目他に所在する曲金北遺跡第 13 次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は静岡市教育委員会が調査主体となり、生活文化局文化スポーツ部文化財課が補助執行した。
調査担当者 鈴木悦之……… (文化財課 主査)
小泉祐紀……… (文化財課 主任主事)
3. 資料整理・遺物の写真撮影は鈴木が行い、遺物の実測・トレス等は鈴木を中心に、臨時職員が実施した。
4. 調査資料は、すべて静岡市生活文化局文化スポーツ部文化財課が保管している (連絡先 〒420-8602 静岡市葵区追手町 5 番 1 号 054-221-1085)
5. 発掘調査にあたっては土地所有者の静岡鉄道株式会社に文化財保護ならびに発掘調査についての深いご理解とご協力を賜った。

本文目次

例言・凡例・目次

1. 調査にいたる経過	1
2. 発掘調査の経過	2
3. 立地と環境	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
4. 調査の成果	5
1 基本土層序	5
2 第 1 検出面	8
3 第 2 検出面	12
5. まとめ	16

挿表目次

第 1 表 既往の発掘調査概要一覧表	4
第 2 表 周辺遺跡一覧表	3
第 3 表 第 1 面水田集計表	11

挿図目次

第 1 図 曲金北遺跡位置図	1
第 2 図 既往の発掘調査地点	2
第 3 図 静岡・清水平野の地形	3
第 4 図 周辺遺跡分布図	4
第 5 図 層柱状図	5
第 6 図 土層柱状図集成	5
第 7 図 調査区東壁土層断面図	6
第 8 図 調査区南壁土層断面図	7
第 9 図 第 1 検出面概略図	8
第 10 図 第 1 検出面平面図及び断面図	9・10
第 11 図 大畦畔盛土内遺物出土状況平面図	11
第 11 図の 2 裸出土位置平面図	11

凡 例

1. 今回の発掘調査を示す記号を「007MGK」とし、発掘調査資料及び出土遺物すべてにこの記号で注記を行った。
2. 本文及び実測図中の高度は海拔高度で表示した。
3. 地図中の方位は真北を示し、実測図中の方位は座標北 (日本測地系) を示す。なお、調査区はほぼ中央の基準統 G10+SS4E の座標値は X = -113,083.011m、Y = -7,383.316m である。
4. 遺構名の表記は次のような略記号を使用した。
SK…畦畔、擬似畦畔
5. 遺物実測図の縮尺は、1/10 とした。
6. 挿表中で、復元・推定値は ()、残存値は < > で示した。
7. 第 1 図は 1/20,000、第 4 図は 1/50,000 地形図、(いずれも国土地理院発行) を基図として使用した。

図版目次

図版 1	1. 第 1 検出面全景 (北方上空から)	11
	2. 第 2 検出面全景 (北方上空から)	12
図版 2	1. 調査区東壁土層断面 (大畦)	13・14
	2. 同上南端部	17
	3. 調査区南壁西半部	18
	4. 大畦畔 SK101 確認状況	19
	5. 第 1 検出面小畦畔確認状況	20
図版 3	1. 第 1 検出面 完掘状況 (東方から)	
	2. 第 1 検出面 完掘状況 (南方から)	
図版 4	1. 第 1 検出面 完掘状況 (西方から)	
	2. SK101 盛土内木製品 (W-7W-8)	
	3. SK101 盛土内木製品 (W-1)	
	4. SK101 盛土内木製品 (W-2W-3)	
	5. SK101 盛土内木製品 (W-5)	
図版 5	1. 第 2 検出面 擬似畦畔出土状況 (南方から)	
	2. 同上 (西方から)	
図版 6	1. 第 2 検出面 完掘状況 (上空から)	
	2. 出土遺物 (木製品)	
	3. 出土遺物 (礫 1~8)	
	4. 出土遺物 (礫 9~16)	

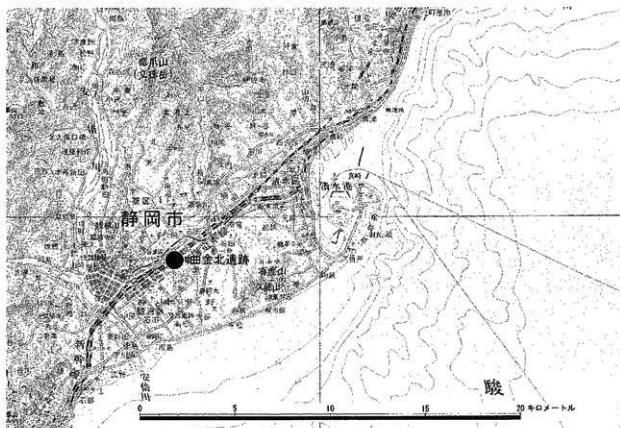
1. 調査に至る経過

曲金北遺跡の所在する東静岡地区（静岡市駿河区曲金・池田及び葵区長沼・榎木）は、かつて旧国鉄の東静岡貨物駅を中心とした県中部地域における物流の拠点で、貨物倉庫、店舗、工場等のほか水田・畑も残る地域であった。昭和60年の国鉄分割民営化に伴い貨物駅は縮小、旧操車場へ移転したことに伴い、旧貨物駅跡地の約20.8haが静岡県・静岡市により取得され、平成5年には土地区画整理事業の事業計画が決定された。平成11年度には県コンベンションアーツセンター（グランシップ）が開館し、これに合わせて東静岡新駅・南北自由通路の供用が開始されたのを契機に、駅南口周辺には集合住宅や個人住宅・店舗等が増加し景観・環境は大きく変化している。

50.5haに及ぶ広大な土地区画整理事業用地は、長らく貨物駅として使用されてきたこともあり用地内における埋蔵文化財の有無は不明であったが、先に述べた県コンベンションアーツセンターの建設に先立ち、静岡県の実施した試掘調査により弥生時代～古墳時代の水田跡、律令期の溝状遺構が確認され、曲金北遺跡と命名された。静岡市も土地区画整理事業用地内の埋蔵文化財の範囲を確認するための試掘確認調査と、道路用地を中心とする本発掘調査を実施し、これまでに、市・県合わせて13回の本発掘調査が実施されている。今回報告する第13次調査は、集合住宅の建設に先立ち実施した本発掘調査である。

平成18年11月、静岡鉄道株式会社から計画の提示があり、これを受けて静岡市教育委員会は計画地の確認調査を実施した。調査の結果、古墳時代中期・弥生時代後期～古墳時代前期の2時期にわたる水田耕作土が残存していること、最浅遺構面は現地表面下1.7mであることが判明した。

確認調査の結果を基に、静岡市と静岡鉄道株式会社の間で埋蔵文化財の取り扱い協議をおこなったが、設計変更は不可能であり、平成19年度に本発掘調査を実施することで合意した。



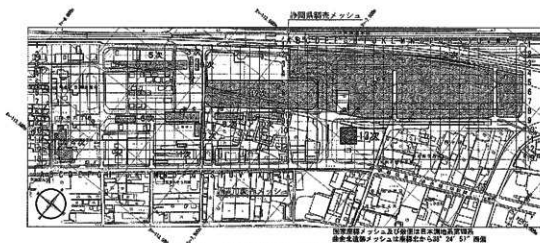
第1図 発掘調査位置図（国土地理院1:200,000地勢図「静岡」）

2. 発掘調査の経過

集合住宅の建設範囲を発掘調査対象としたが、敷地内に重機掘削土（上土）・調査排土の置き場と、関係者の駐車場や休憩所を確保する必要があり、当初計画していた重機掘削の上端を約1m内側へ移動し対応せざるを得なかった。そのため最終的な調査対象面積は、重機掘削上端で約960㎡、人力掘削対象面積は約500㎡となった。

調査地は土地区画整理事業に伴い盛土整地がなされているため、この盛土・整地土及び旧水田土を重機（バックホー0.6㎡）にて掘削した後、人力により掘り下げ、遺構検出をおこなった。人力掘削時にはベルトコンベアーを使用し、排土効率の向上を図った。

記録作業にかかる基準ラインは、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下静岡文研）が実施した第1次調査にて設定された20m方眼を使用することとしたが、当時使用された基準点は土地区画整理事業に伴う工事により失われていることから、机上計算により基準ラインを復元した。測量基準杭の設置及び、遺構平面図の作成は株式会社フジヤマに委託し、土層断面図・水田面のエレベーション図・遺物出土状況の平面図は調査担当者及び臨時職員が作成した。写真記録は中型カメラ（6×7判、モノクロ）と小型カメラ（35ミリ、モノクロ・ネガカラー）、デジタルカメラ（1眼レフ600万画素）を使用して調査担当者が撮影したほか、写真測量に伴う空中写真撮影の付帯業務として、ラジコンヘリコプターを使用した垂直・斜めの航空写真を撮影した。記録作業終了後、再び重機を使用して調査排土・上土を廻り戻し、現地作業を終了した。



第2図 調査区配置図 (S=1/8,000)

調査次数	調査期間	調査実施機関	調査内容	検出遺構	出土遺物	特記事項	文庫
1	H6.4.1 ~ H7.5.31	静岡県埋蔵文化財調査研究所	布織地層検	道路遺構・水田	土器類、木簡、農耕具		1・2
2	H7.7.17 ~ H7.8.16	静岡市教育委員会	家跡調査・口縁状検	道路遺構・水田	土器類		12
3	H8.10.1 ~ H8.10.11	静岡市教育委員会	水田検出	道路遺構・水田	土器類	短冊記録	12
4	H9.8.1 ~ H9.9.20	静岡市教育委員会	松原地区検	水田	土器・木製品	受託事業	3
5	H9.8.1 ~ H9.12.22	静岡市教育委員会	土地区画整理事業	道路遺構	土器・木製品		12
6	H10.6.1 ~ H10.11.15	静岡市教育委員会	東静岡中央検	水田	土器・木製品・農具		4
7	H15.1.27 ~ H15.6.27	静岡市教育委員会	東静岡市北検	水田	土器・木製品・小刀	文庫6では6次	6
8	H16.2.1 ~ H16.6.31	静岡市教育委員会	東静岡中央検	水田	土器・木製品	文庫7では7次	7
9	H17.1.5 ~ H17.5.31	静岡市教育委員会	東静岡中央検	道路遺構・水田	土器・木製品		12
10	H17.5.1 ~ H17.11.30	静岡市教育委員会	東静岡中央検	水田	土器・木製品		8
11	H18.8.16 ~ H18.9.30	静岡市教育委員会	東静岡中央検	水田	土器・木製品	受託事業	10
12	H19.6 ~ H21.3	静岡県埋蔵文化財調査研究所	鳥居地区検	水田	土器・木製品	調査中	13
13	H19.8.25 ~ H19.11.21	静岡市教育委員会	集合住宅建設	水田	木製品	受託事業	11

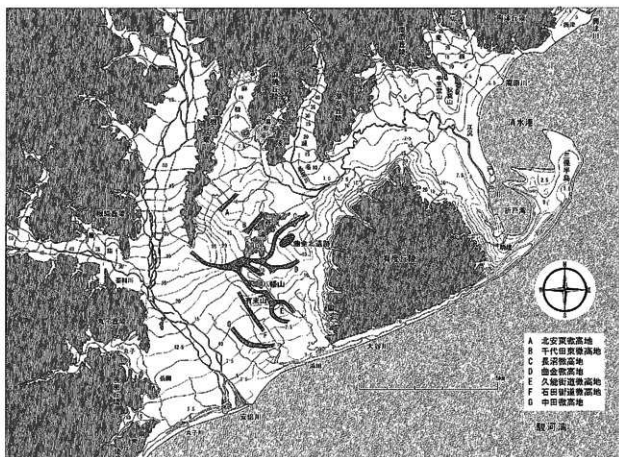
第1表 既往の発掘調査概要一覧表

3. 立地と環境

1 地理的環境 曲金北遺跡の所在する静岡平野（静岡平野・清水平野）は駿河湾に面した、東西約14 km、南北約9 kmの沖積平野である。西方は標高約500mの高草山により志太平野と囲まれ、東方は興津丘陵が海岸付近まで迫ることで、ごく狭小平野部を残す。北方は竜爪山系から幾本もの丘陵が平野部へ細長く伸びている。平野の南部には標高約307mの有度山が所在し旧静岡市域と旧清水市域を画しているほか、谷津山・八幡山・有東山といった独立丘陵が島状に点在している。

現在駿機山丘陵の西側を南流する安倍川は、中世以降の為政者による築堤がなされるまでは洪水が頻発する河川で、幾筋もの支流が駿機山丘陵の先端部を扇状として、北東～南東方向へ五指状に延びていたと考えられ、氾濫時には大量の土砂を周辺域へもたらした。先に触れた島状に点在する独立丘陵は氾濫の方向に影響を及ぼすとともに、その周辺に後背湿地を生成させた。これが自然堤防状の微高地と後背湿地としての低地を平野部につくりだし、その後の弥生時代集落の形成に大きな影響を及ぼしている。

古墳時代中期から後期にかけて（5世紀後半から6世紀代にかけて）平野部で洪水が頻発している様子が平野部の発掘調査においても確認されている。今回報告する曲金北遺跡の周辺においては、曲金微高地・長沼微高地と呼ばれる沖積層の上部礫層（文献14、前者が縄文時代中期～弥生時代にかけて、後者が古墳時代以降に形成されたと推定されている）が存在している。駿機山丘陵の先端部から延びる微高地のうち、谷津山から南へ延びる張り出し部分の南端部をかすめるように東へ延び、北東方向と、南東方向へ分岐する。このうち後者が曲金微高地、前者が長沼微高地と呼ばれる支脈である。

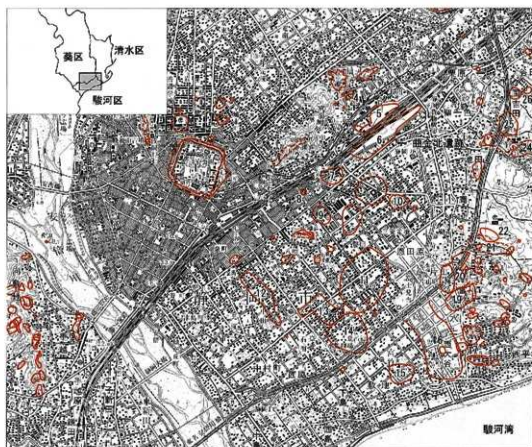


第3図 静岡・清水平野の地形（明治22年測量）

〔特別図 静岡・清水平野の弥生時代一割出土品に見る弥生時代一〕
1988 静岡県立歴史博物館の協力を得てリリース、複製した。

2 歴史的環境 静岡平野およびその周辺の丘陵部には旧石器時代から中近世に至る各時代の遺跡が数多く分布している。縄文時代の海進期には、現在の平野部はほとんどが水域であったと推定され、縄文時代の遺跡は平野周辺の丘陵部に位置しているが、弥生時代中期中葉以降には、有東遺跡・駿府城内遺跡など平野部での集落形成が確認され、同後葉になると、集落の範囲もより広く複数の墓域を形成するに至る。曲金北遺跡においても、第1次・第6次調査で当該期の土器が出土しており、何らかの生活領域にあったことがうかがえる。弥生時代後期前半代の居住域は中期後葉代と比べ狭く、分散化するとともに水田域の拡大する様子が認められる一方で、登呂遺跡・磨ノ道遺跡の調査からは洪水の影響を受けている様子もうかがわれる。また、後期後半代には上ノ山遺跡・寺ノ久保遺跡・東原ノ坪遺跡など丘陵状に立地する遺跡も出現し、何らかの社会構造の変化があったことも想定される。

古墳時代に入ると、曲金北遺跡北西の谷津山山頂部に柚木山神古墳（谷津山1号墳・4世紀）が築造される。全長100mを超える県内最大規模の前方後円墳である。また八幡山東の舌状微高地上に立地する小黒遺跡では、周囲に板垣を巡らし独立棟持柱を伴う掘立柱建物が確認され、銅剣・銅鏝や琥珀原石、畿内・尾張・北陸系の鍔入土器が豊富に出土するなど、本地域の中心的集落と考えられる。中期段階になると、上述したように平野部各所で洪水の影響が認められるようになり、居住域のありかたについては調査事例も少なく不明点が多い。周辺丘陵部には中期後半から古墳群が形成されるようになり、有度山の西麓にも上ノ山古墳群・宮川古墳群・小黒古墳群など数多くの古墳が確認される。



第4図 周辺遺跡分布図（国土地理院 1/50,000地形図を縮小）

1 駿府城址・駿府城内遺跡	2 谷津山古墳群	3 清水瓦面跡	4 小黒坪遺跡
5 長河遺跡	6 曲金北遺跡	7 曲金北遺跡	8 磨ノ道遺跡
9 小黒遺跡	10 小黒新本組合伴遺跡	11 有東遺跡	12 タイセイ遺跡
13 磨ノ道遺跡	14 登呂遺跡	15 磨入遺跡	16 元宮川神田町遺跡
17 栗田遺跡	18 上ノ山遺跡	19 宮川遺跡・宮川古墳群	20 佐藤片山南寺跡
21 小黒史前部	22 磨ノ道遺跡	23 矢澤村・西前寺遺跡	24 小黒平遺跡
25 寺ノ久保遺跡	26 東原ノ坪遺跡		

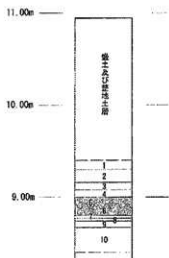
第2表 周辺遺跡一覧表

4. 発掘調査の成果

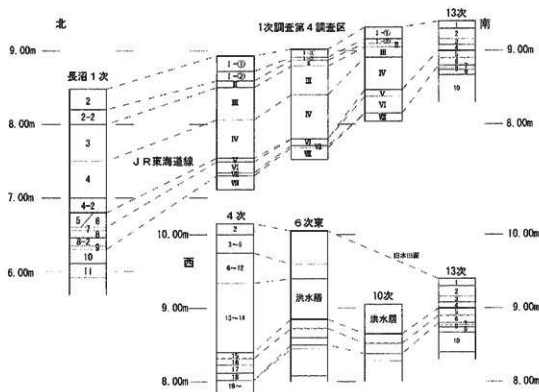
1. 基本土層序 今回報告する曲金北遺跡第13次調査地点は、第1次調査区の南、東静岡中央線の建設に伴う第8次・第10次調査の東側にあたる。現地調査における土層の把握に際しては、隣接する調査区の状況を参考にしたが、細部にわたり対応させることは困難なため、調査毎に土層番号を付した。

第13次調査の土層は盛土・整地土を除き、以下を10層に分けた(第5図・第7図・第8図)。6層は静岡平野一帯で「登呂層」と呼称されている黒褐色の有機質土層である。7層中には、本地域において縄文時代後晩期の指標とされている火山灰層である「大沢スコリア(F-Os)」、「カワゴ平バミス(Kgp)」の薄層が観察される(図版2-1~2-3)。

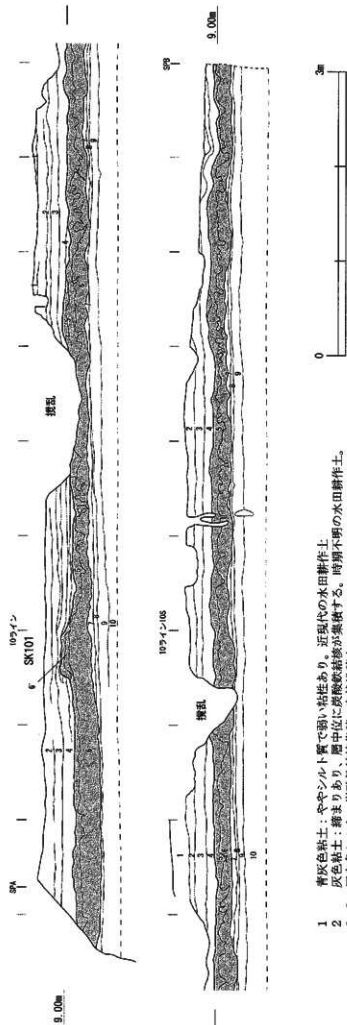
現況地表面は土地区画整理による盛土整地により概ね海拔11m前後となっているが、旧地表面(かつて水田として利用されていた段階)は9.5m程であり現在の地表から旧地形をうかがうことは困難になっている。この点を補うため、周辺の調査事例と比較してみたのが、第6図である。南北方向のデータは第1次調査及びJR東海道線以北に所在する長沼遺跡1次調査(静岡市教委平成8年度調査 東静岡駅北1)で補足した。今回の5層間で比較すると、東西方向・南北方向のいずれも、今回の調査地点が最も高いことがわかる。ただし南北方向では北側へ向かって傾斜していくのに対して、東西方向の柱状図では、第6次調査区付近で一旦高くなる状況が確認される。現状の資料では位置・方向は特定できないが、第6次調査区東部分に隆高地(或いはその支脈)が存在する可能性がある。



第5図 土層柱状図

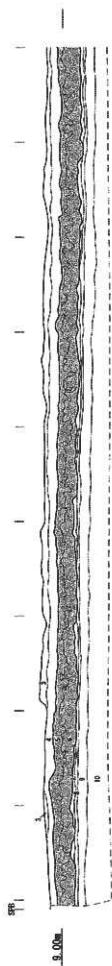


第6図 土層柱状図集成

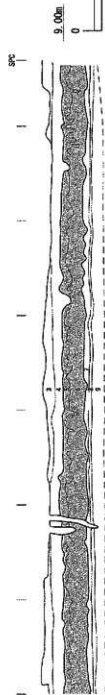


- 1 青灰色粘土：ややシルト質で弱い粘性あり。近現代の水田耕作土
- 2 灰色粘土：締まりあり、層中に炭酸鉄結核が集積する。時期不明の水田耕作土。
- 2-2 灰色シルト：炭酸鉄結核集積。自然堆積土
- 3 灰色系シルト・緑砂の互層：自然堆積土
- 4 灰色粘土：淡茶色粘土・灰白色シルトの組み合わせが2回確認される
- 5 黒褐色粘土・灰褐色粘土・灰白色シルトの交互層：凝り具合は場所により異なるが全体に大き目（径5cmより大きいものを含む）のブロック状（古墳時代中期の水田耕作土）
- 6 茶褐色粘土：暗色で全体に凝り混じり。白色粒子（F-Os, Kgp由来）が全体に含まれる。（弥生時代後期～古墳時代前期の水田耕作土）
- 6' 黒褐色粘土：白色シルト混、SK101盛土の一部
- 7 黒褐色凝結：F-Os, Kgpの帯層を挟む
- 8 黒褐色粘土：粘性は弱めで締まりややあり
- 9 暗褐色泥質シルト：上半は茶系、下半は黒色系で弱い粘性あり、締まる。
- 10 灰白色砂質シルト：下位ほどシルト分が少なく、砂層へ移行していく

第7図 調査区東壁土層断面図



南北ライン



第8図 調査区附壁土層断面図

※地盤力荷は1/40、左右力荷は1/100

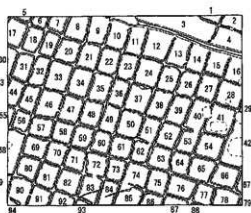


第8-2図 調査区北壁土層断面図

2 第1検出面 今回の調査における第1検出面は、5層とした黒褐色粘土・灰褐色粘土・灰白色粘土の混在層の上面で、古墳時代中期の水田面に相当する。水田面は灰白色シルト(4層)によって被覆されているため、畦畔の上面が露出する高さまで水平に削り、畦畔の上面が見え始めるところから5層上面を追うように検出を進めていった(図版2-4、2-5)。5層上面はおおむね調査区の南半部に帯状に高い部分が分布し、この付近が標高9m前後で最も高く、北・西へ向けて下がっていく。

調査区の北側で東西方向の大畦畔SK101が検出された。平面検出できたのは延長約15mで、両端は調査区外へ続く。畦の方向は緩やかに蛇行しているが全体としては座標方向の東西から北へ約21度振れ、幅は東側で0.6~0.7mと狭く、西側では1.1m程に広がる。盛土の高さは東側で10~13cmほどであるが、西側では2~3cmと低くなる。この低平な部分は水口であった可能性が高い。断面形状は台形で上面は多少の起伏があるもののほぼ平坦面をなす。水田面との比高差は南側で小さく、北側で大きい。

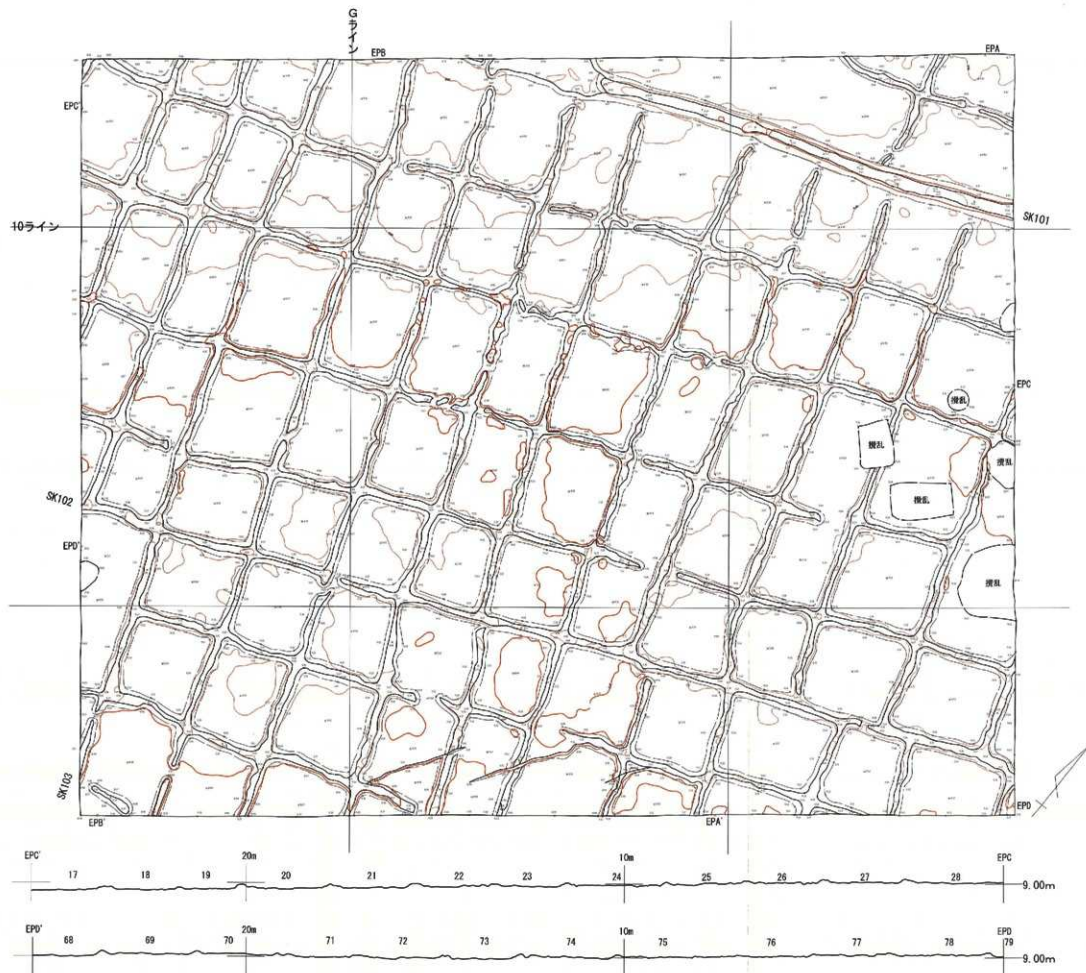
SK101北側では4面の小区画が確認された(1~4)。いずれも部分的に検出されているだけで、面積は不明である。南側では90面が確認された。小畦畔はおおむね2.0~3.0mの間隔でSK101とはほぼ平行する方向と、それに直交する1.5~2.5m間隔のものが有り、南北方向に長い長方形の区画が多い。区画の面積は、2区画が一帯に検出されている可能性がある小区画42と68を除くと、4㎡~7㎡と非常に小さい区画が多くなっている。SK101以南の小区画を平面的に観察すると、小畦畔のうち、区画68から78の北側をとるもの(SK102)と、区画8から94の西側をとるもの(SK103)は、前者はこれを境として南北方向の小畦畔が「あみだくじ」状にずれていること、後者は南北方向の小畦畔の間隔が異なることから「区畝畦畔(文獻19)」として、大区画内の細分にあたり基準となった小畦畔と推定される。また第8図中の断面図から、高さや傾斜の変換点となる小畦畔がいくつか認められる。断面C-C'においては小区画13・25・38・51・62の東をとる小畦畔を境として水田面の高さ、傾斜に違いがある。断面D-D'では、小区画76と77の間、72と73の間で高さ、傾斜が変わっている。続いて南北方向の断面では断面A-A'・B-B'ともにSK101から2本南の小畦畔を境に北側への傾斜が急になっている。



第9図 第1検出面概略図

小区画 番号	北緯	東経	面積	傾斜	水田 番号	北緯	東経	面積	傾斜
1	-	-	-	SK101	46	2.07	2.02	0.23	0.02
2	-	-	-	SK101	49	1.72	2.00	0.75	0.08
3	-	2.25	-	SK101	50	2.24	2.77	0.10	0.09
4	-	2.39	-	SK101	51	1.90	2.60	0.50	0.02
5	-	-	-	SK101	52	2.12	2.64	0.31	0.05
6	1.62	-	-	SK101	53	1.82	2.38	0.38	0.04
7	1.80	-	-	SK101	54	2.05	2.49	0.28	0.05
8	2.30	-	-	SK101	55	-	-	-	SK101
9	1.80	3.00	15.40	0.82	56	1.69	2.62	0.20	0.03
10	2.00	3.10	5.88	0.84	57	2.26	2.06	0.73	0.05
11	1.70	3.30	3.20	0.80	58	2.02	2.11	1.30	0.05
12	2.30	3.30	3.43	0.88	59	2.02	2.33	0.51	0.06
13	1.90	3.10	5.00	0.90	60	1.78	2.29	0.41	0.04
14	1.90	2.97	5.70	0.82	61	2.20	2.10	0.77	0.02
15	2.02	2.66	2.46	0.80	62	1.78	2.27	0.83	0.02
16	-	2.66	-	SK101	63	2.03	2.61	2.30	0.06
17	2.11	2.73	5.80	0.84	64	1.98	2.59	0.40	0.04
18	1.69	2.62	4.30	0.86	65	2.23	2.49	0.85	0.04
19	1.52	2.57	3.91	0.86	66	2.45	2.25	0.50	0.03
20	2.31	2.41	0.83	0.91	67	-	-	-	SK101
21	2.06	2.65	0.30	0.90	68	-	-	-	SK101
22	1.69	2.67	0.30	0.93	69	2.33	2.13	0.81	0.06
23	1.85	2.74	4.72	0.94	70	2.40	2.30	0.52	0.06
24	2.39	2.81	0.82	0.95	71	2.03	2.21	0.60	0.04
25	1.94	2.72	0.94	0.96	72	1.99	2.13	0.40	0.02
26	1.69	2.64	0.51	0.99	73	1.81	2.37	0.18	0.03
27	1.66	2.63	0.18	0.97	74	2.42	2.31	0.56	0.03
28	2.05	2.53	0.70	0.97	75	2.03	2.39	0.90	0.02
29	-	-	-	SK101	76	2.63	2.15	0.90	0.02
30	-	-	-	SK101	77	1.72	2.08	0.40	0.02
31	1.76	2.65	0.85	0.92	78	2.60	-	-	SK101
32	1.83	2.18	0.79	0.94	79	-	-	-	SK101
33	2.31	2.90	2.91	0.97	80	2.18	2.04	0.68	0.03
34	2.12	2.90	0.15	0.98	81	2.04	2.05	0.90	0.04
35	1.91	2.97	0.73	0.97	82	2.29	2.38	0.50	0.03
36	1.65	2.90	0.77	0.97	83	1.96	2.73	0.90	0.00
37	2.40	2.68	0.61	0.99	84	1.98	-	-	SK101
38	1.96	2.97	0.82	0.92	85	2.47	-	-	SK101
39	1.89	3.32	0.72	0.93	86	2.13	-	-	SK101
40	1.97	3.33	0.43	0.92	87	2.53	-	-	SK101
41	2.61	2.97	0.52	0.92	88	-	-	-	SK101
42	2.45	-	-	SK101	89	-	-	-	SK101
43	-	-	-	SK101	90	2.31	2.20	5.11	0.87
44	1.60	2.79	0.40	0.97	91	2.00	-	-	SK101
45	1.70	2.79	0.14	0.99	92	2.45	-	-	SK101
46	2.27	2.96	0.87	0.94	93	-	-	-	SK101
47	2.17	2.73	0.78	0.93	94	-	-	-	SK101

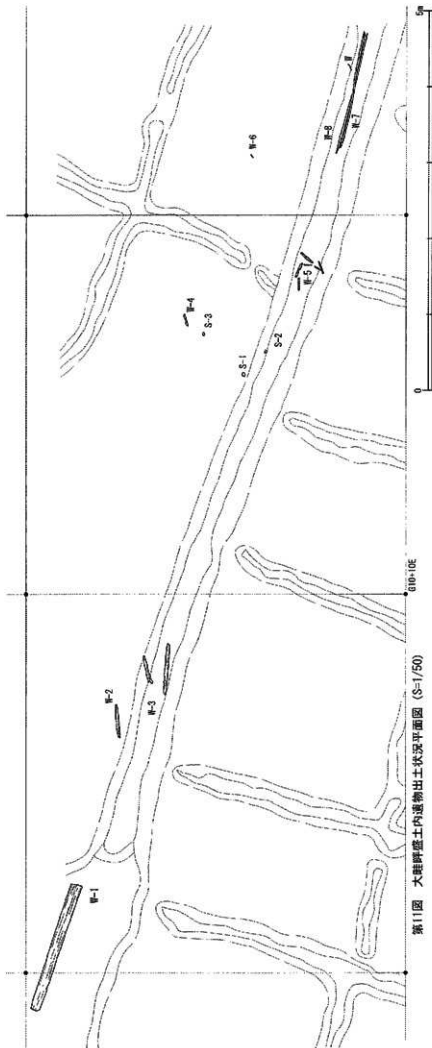
第3表 第1面水田集計表



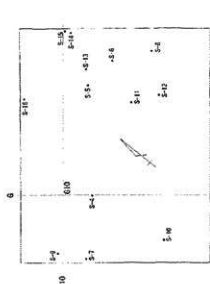
断面図の天地方向は1/50、左右方向は1/100で地形の高まりを強調している

第10図 第1検出面平面図及び断面図 (S=1/100)

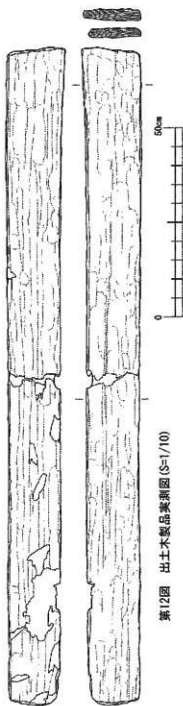




第11図 大埴野堂土内遺物出土状況平面図 (S=1/50)



第11図の2 出土土位置平面図 (S=1/400)



第12図 出土木製品実測図 (S=1/10)

小区画 83 から 85 にかけて、地震で生じた断層と考えられる段差が検出された。いずれも調査区内で終息しており土層断面で確認することはできなかったが、これまでの曲金北遺跡発掘調査の中でも、幾度か確認例があり、第 6 次調査の西区では、近現代の水田耕作土除去面（平安期？）において断層を検出している。これらの断層が生じる原因となった地震が同一のものなのかや、また生成時期を特定することは現状では困難である。静岡市付近を震央とする大規模な地震には近世以降に限っても、天保久能山地震（1841 年）や大正静岡地震（1917 年）、昭和 10 年静岡地震（1935 年）があげられる（文献 17）。ことに昭和 10 年静岡地震（大谷地震）は、静岡市清水区草薙付近を震央とする M6.4 の直下型地震であり、家屋全壊 237 軒・同半壊 1,412 件と大きな被害をもたらした。曲金北遺跡は有度山の周辺域でありかつ軟弱地盤という点からも、同地震の影響による可能性が高いものと考えられる。

遺物は、第 1 検出面の SK101 とその周辺域を中心に出土している（第 11 図）ものの、量は合計 17 点と少なかった。内訳は木製品 14 点と礫 3 点である。出土状況について詳細にみると、SK101 盛土範囲とはほぼ重なるように木製品・礫がまばらに点在する状況である。木製品のうち長いもの（W-1・W-7・W-8）はほぼ SK101 と同じ方向であるが、比較的短い（小さい）ものの方向は様々である。また遺物底面レベルを比較すると東側で標高 8.9m 西側で 8.7m とほぼ同一面と考えてよく、SK101 の盛土に伴い埋設された一連の遺物と理解される。

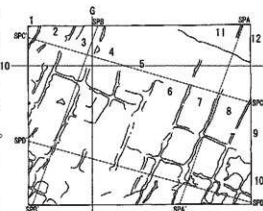
木製品には、板状・棒状・枝状のものがああり、うち板状木製品 1 点を図示した（第 12 図）。W-1 は調査区の北壁沿い、調査区北側排水溝にかかる状態で出土した板状木製品である。SK101 が低平になる部分とはほぼ重なり、やや北寄り（東側の下端ラインの延長上）で、先に述べたとおり SK101 と同様の方向で埋め込まれる。この低平部分は水口と推定されるため、当該部分の養生を目的として埋設されたものと推定される。幅は 13～15 cm で長さは約 176 cm、厚さは最大で 3 cm を測る。全体に風化しているものの表面調整痕がわずかに観察される。図の右側（出土状況では東側）の小口は斜めに切断されるが、反対側はやや丸みを帯びる。穿孔は見られない。W-1 の他にも棒状の木製品が出土しているが、加工痕が不明瞭なものや、樹皮を残した枝状のものであるため、図示していない。

礫（図版 6-3）は SK101 付近から 3 点出土している。うち 1 点（S-2）が SK101 盛土内、他の 2 点（S-1、S-3）が SK101 北脇から出土している。S-1 が約 80g、S-2 が約 40g、S-3 が約 45g で長径 6 cm 程度の砂岩である。

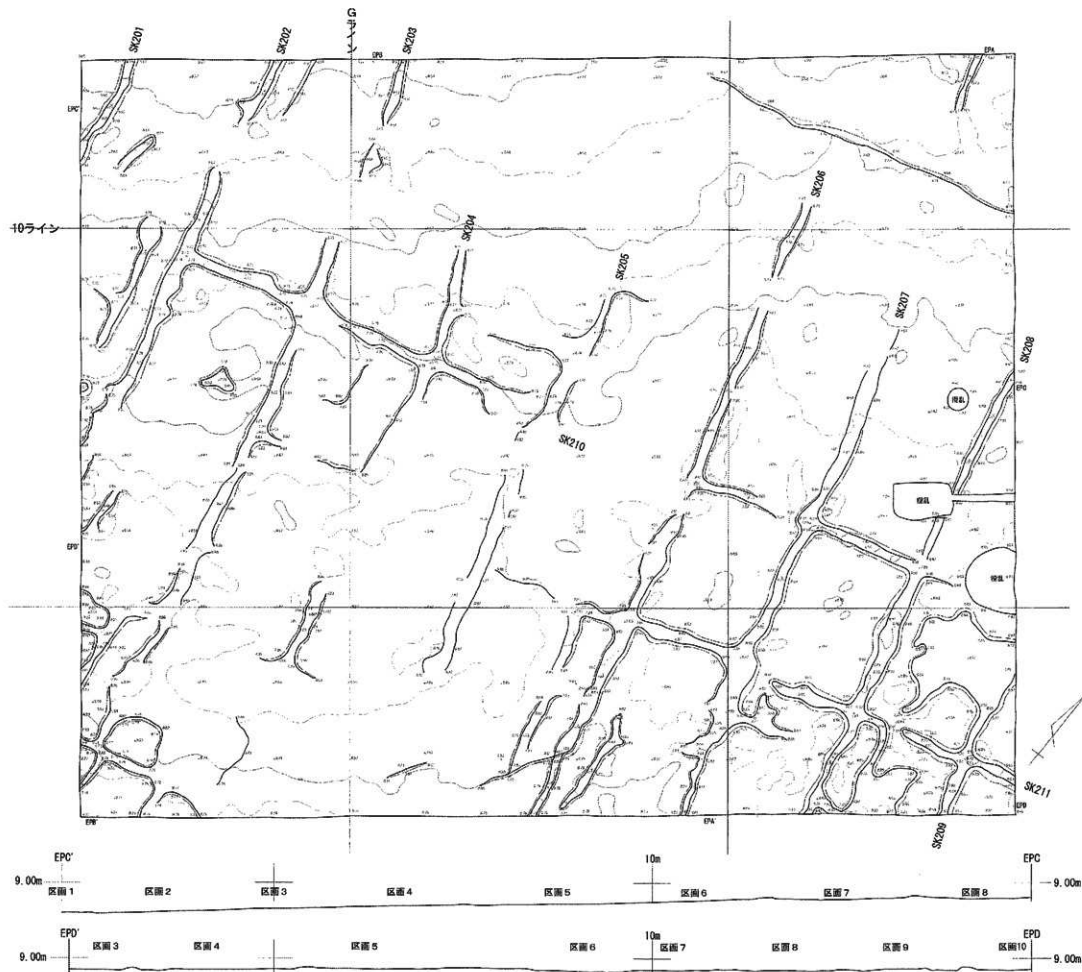
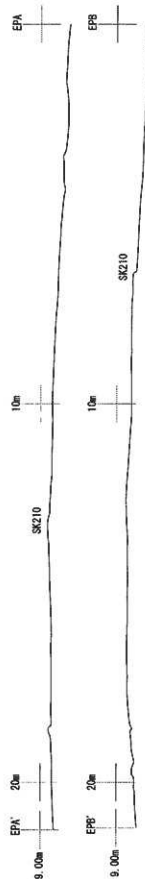
3. 第 2 検出面 6 層（暗茶褐色粘土）は弥生時代後期～古墳時代前期と推定される水田耕作土である。水田面となる 6 層の上面は 5 層の耕作により残存していないことが確認されたため、耕作土中の遺物採集と、耕作土の下面（下床面）の検出を目的として、耕作土の掘り下げをおこなった。

調査区周辺の壁面を観察すると、6 層下面は耕作の影響により起伏が目立ち、深い部分では 9 層の上面に及ぶが、おおむね直下層の 7 層から 8 層の中で起伏している状況であった。7 層中位には火山灰層（F-Os、Kgp）の厚層が含まれており、これが黒褐色土層との対比でよく目立つことから、同層の失われている部分と残存部分が交互に存在する様子が看取できた。そこで、6 層の下部を水平に割り、平面的に 7 層の残存状況を確認することとした。その結果、7 層の残存部分（疑似畦畔 B）が帯状に並列し、一部区画状をなすことが判明した（図版 5）。続いて、7 層残存部からなる区画内部を掘り下げ、6 層耕作土を除去したのが第 2 検出面である（注 1）。

6 層下床面は大きく南から北へと傾斜しており、東西方向ではほとんど比高差は認められない。また、第 1 検出面



第13図 第2検出面概略図



断面図の天地方向は1/50、左右方向は1/100で地形の高まりを強調している

第14図 第2検出面平面図及び断面図 (S=1/100)

5. まとめ

1. 古墳時代中期の水田跡 5層上面で確認した水田面は、第1次調査で確認されたⅥ層の上部に対応するものと考えられる。発掘調査報告書の記述を見る限り、第1次調査では、弥生時代(中)後期から続く水田耕作土と断面観察において明瞭に分離できないようであり、第13次調査及び東静岡中央線の築造に伴う静岡市教委の発掘調査(第6・7・8・10次調査)で検出している、洪水層直下の古墳時代中期の水田耕作土とは、若干土質が異なるような印象を受ける。この違いは、本来のⅥ層(弥生時代中後期～古墳時代前期)の廃絶後に堆積した土層の厚みによるものであろう。この間層が厚い地点では、耕作土は明色でシルト質になり、薄い地点ではⅥ層に近いものとなる。これまで市教委の実施してきた山金北遺跡発掘調査の中でこの状況に最も近いと考えられるのは第6次調査(第15図の2)である。幅5～6mを測る幅広の大畦畔の南側の区画のみ、より明色の耕作土による小畦畔の区画(Ⅴ層対応?)が残存していた。水田面部分は被覆層との区別が平面でつきにくく、若干削り込んでいるため下位のより暗色の小畦畔(Ⅵ層)が露出した状況で検出している。上述した大畦畔の北側は暗色の水田面であるため、おそらくこちらもⅥ層に対応するものであろう。また、JR東海道本線北側で実施された長沼遺跡第1次調査においても古墳時代中期と考えられる水田(Ⅵ層対応)面の埋没後、大畦畔を境とした片側の区画のみ、Ⅴ層対応とみられるやや明色の耕作土および小区画畦畔が確認できている。

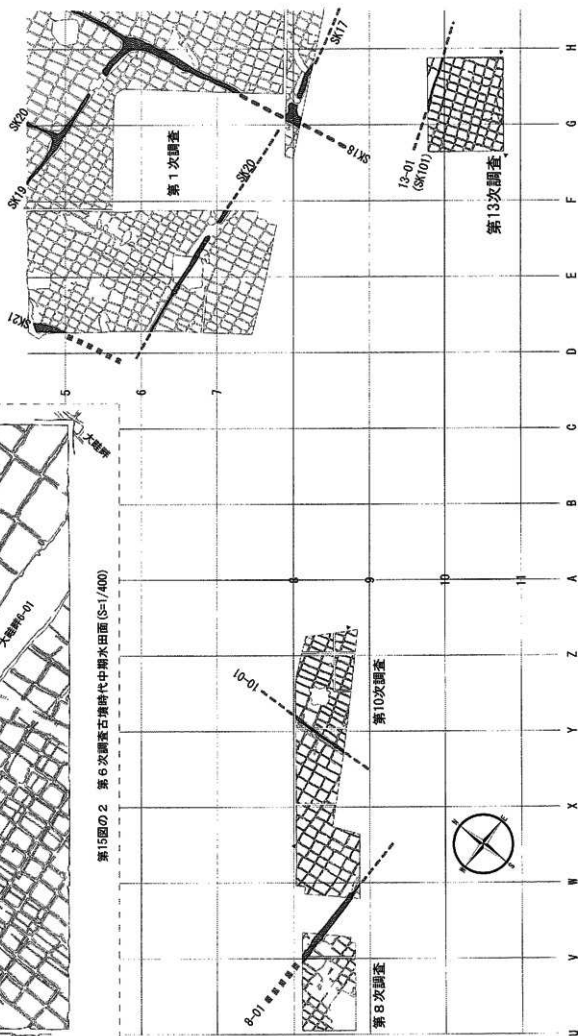
この第1次調査Ⅵ層に対応する水田面について、上記の対応関係を前提に周辺事例と比較してみることにする。まず大畦畔について見ると、今回の調査区北端付近で検出されたSK101の北方30数mには第1次調査の東西大畦畔SK17が存在する。SK101とSK17は、第1次調査の大畦畔の分布状況から、一つの大区画の南と北にあたるものの可能性が高い。SK101は北に約21°、SK17は約14°振れており、やや西側に開く区画の形状が想定される。SK17の西端は南北方向の大畦畔SK18に取り付き、SK18はそのまま南方へ伸びるため、SK101はSK17同様、SK18に取り付くか、交差してさらに伸びる可能性があるが、交点は調査区外(西側)を通るようであり、今回は未検出である。また、市教委が東静岡中央線の築造に先立ち実施してきた調査においては、大畦畔はほぼ東西・南北にそって敷設されたものが多く、第1次調査及び今回の第13次調査の状況とは状況を異にしている。次に小畦畔に注目すると、今回のSK101以南の小畦畔の南北方向は先述した第1次調査のSK17以北の小畦畔と方向が類似(北から約16度西偏)しており、同じ南北方向である大畦畔SK18(と想定される南への延長)とは平行でない。また、第10次調査では南北方向の大畦畔10-01の東西で、東西方向小畦畔の方向が大きく異なり、10-01以東は13次調査地点と近い。以上、大畦畔・小畦畔の検出状況から見て、第10次調査の大畦畔10-01を境として東西で大きく水田区画の方向性が異なることがわかる。第6図で示したように第6次調査区付近から第10次調査区にかけては西から東へ、第13次調査区から第10次調査区にかけては東から西への傾斜が確認されており第10次調査区付近が地形の変換点になっていることがその大きな要因であろう。現在、静岡県埋蔵文化財調査研究所により第8次調査・第10次調査区北側の県有地一帯を対象とした第12次調査が実施されているところであり、その成果からより詳細な分析がなされることが期待される。

また、小畦畔による区画の平面形態を観察する中で、他に比べより「とおり」の良いものがあり、大畦畔による区画内部を分割する際の基準とされたものであることがこれまでも指摘されているが、今回の調査においても狭い調査範囲にかかわらず、同様の「区割畦畔」とみられるものが存在し、断面の検討でもこの「区割畦畔」を境として水田面の傾斜が異なることが確認できた。

※図面化した小間時は大間時6-01は型に対応する



第15図の2 第6次調査古墳時代中期水田面 (S=1/400)



第15図の1 曲金北道跡古墳時代中期水田面集成図 (S=1/1000)

2. 擬似畦畔について 第2検出面は、6層水田の耕作土除去面（下床面）に相当し畦畔状の高まり（擬似畦畔B、第16図）が検出された。これまで静岡市内で実施された水田跡の発掘調査においては、有東梶子遺跡第3次調査で耕作により形成された微起伏面が初めて検出されて以来、検出例も増加している。今回の調査事例の位置づけを行うため若干の事例を紹介したい。

(1) 有東（梶子）遺跡（第17図1） 静岡市内における擬似畦畔Bの初例である。第3次調査において、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる水田耕作土の下面に、水田面と似た方向を示す高まり列が検出された。高まりの間隔は水田面と比較して狭く、およそ半分ほどであった。また、水田面における畦畔の位置とは類似するものの一致はしておらず、下床面は検出された水田面に伴うものではなく、開田時に「ウネダ」のような耕作形態をとっていた名残ではないかとの考察がなされている。このほか有東遺跡においては、弥生時代中期段階の水田に伴うと推定される擬似畦畔Bが検出されている。

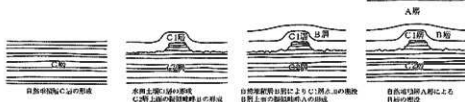
(2) 土土遺跡（第17図5） 静岡平野北側の麻機低地に位置する。第1次調査において、有東梶子遺跡同様幅の狭い高まり列が検出されている。高まりには、高さがあり比較的連続の良いものと、その中央付近に存在するやや低く連続の悪いものの2者がありそれが交互に列をなす部分、高低の組み合わせが見出しにくい部分が存在するが、全体として南北方向の高まりが連続もよく優勢である（図1）。

(3) 曲曲北遺跡（第17図2.3.4） 静岡県泉蔵文化財調査研究所が実施した第1次調査において、擬似畦畔Bが確認されているほか、市教委の調査でも、第6次調査において高まり列が検出された。土土遺跡同様一方向の高まりが卓越し、高低の組み合わせが認められる。一方で、第10次・第11次のように卓越する方向性は見出せるものの全体的に不明瞭であった地点もある。また、第10次調査の古墳時代中期水田においては、水田面における大畦畔、小畦畔のほぼ直下で擬似畦畔が検出されている。これは弥生時代後期～古墳時代前期の事例とは異なり、整然とした水田区画状の平面形態である。

(4) 長沼遺跡（第17図6） 第2次調査・第3次調査で確認している。第3次調査例（第17図-6）は大畦に伴うと考えられる擬似畦畔Bが明瞭に確認されたほか、南北方向に卓越する高まりが断続的に確認された。また、耕作土上面では小区画畦畔が部分的に検出されたが、これは先に述べた大畦畔と重なる位置にあり、大きな区画の変更がなされていることが想定される。

(5) 鷹ノ道遺跡 第7次調査において大畦畔及び小畦畔の擬似畦畔B（古墳時代中期）が検出された。曲曲北遺跡第10次同様水田区画状の検出状況であった。このほか第12次調査においても大畦畔上面において上層の擬似畦畔Bが確認されている（古墳時代中期）。

以上、静岡市教委の調査事例の中で代表的なものを掲げたが、平面形態で大きく2つに分けられる。有東梶子遺跡第2次、土土遺跡第1次、曲曲北遺跡第6次例に代表される、一方向の高まりが卓越する、細い溝が並列するような形状のもの（ウネ状）と、曲曲北遺跡第10次、鷹ノ道遺跡第7次例のような、水田面の区画をそのまま下層土へ投影したような形状（水田区画状）のものである。前者の特徴として、列をなす高まりに高低差があり交互（1本置き）に並んでいる点がある（図2）。後者の検出状況（図3）は、本来の擬似畦畔Bの定義（図16）に即したものと考えられるが、前者については、「擬似畦畔B」と呼んでよいものなのか、具体的には水田面の状況をそのまま反映したものなのかという点が問題となる。



第16図 畦畔・擬似畦畔模式図

文献19を再トレース（一部改変）

1. 有東遺跡 (有東掘子遺跡) 第3次 (弥生時代後期～古墳時代前期)



2. 曲金北遺跡第11次 (弥生時代後期～古墳時代前期)



大睦

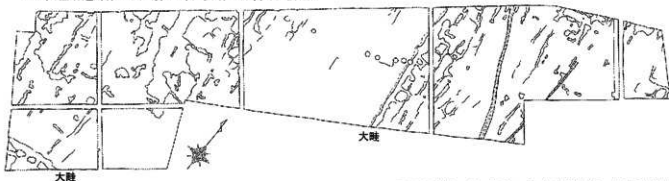
3. 曲金北遺跡第6次 (弥生時代中期・後期～古墳時代前期)

弥生時代中期溝状遺構



大睦 大睦

4. 曲金北遺跡第10次 (弥生時代後期～古墳時代前期)



大睦

大睦

6. 長沼遺跡第3次 (部分 弥生時代後期～古墳時代前期)



大睦

大睦

5. 上土遺跡第1次 (弥生時代後期～古墳時代前期)



大睦

0 20m

第17図 静岡市内擬似畦畔B集成図1 (S=1/400)

水田Aが関われる

地形低下に原因の増水が発生される

↓

河道の変更なし

水田Aの耕作期間

↓

区画を変更

水田Aが満飽、増設

水田Aの増設に伴い灌漑から保水機能が確保できない

↓

灌漑が停止

水田Bが関われる

↓

直上に堤防

水田Aの増設に伴い水田Bの浸没時期Dとして残存

↓

ずれた位置

水田Aの増設に伴い浸没時期Dが消失

3. 水田区画の変更と擬似畦畔B模式図

静岡市域での弥生時代後期～古墳時代前期の水田区画、ことに小区画のあり方については、調査件数の多さに反して実際のところあまりよくわかっていないのが実態である。藤ノ遺跡第10次調査において検出されている当該期の水田区画は1辺8～10mの比較的大い区画で構成されているが、第7次調査の下層では短辺1mほどの区画もあり、変異が大きい。また、先に述べたより長沼遺跡第2次、第3次調査においても同様に極小の区画が確認されており、極小区画が存在していたことはほぼ間違いない事実である。しかしながら、擬似畦畔Bの事例は「ウネ状」のものも多く、また水田面とその下床面がセットで確認された例は少ない上、平面的に位置が一致する例は少ない。

上のような事例を踏まえた上で、現時点では、検出作業で先に確認されるもの（高いもの）が本来の疑似畦畔Bであり、本来の水田区画を反映しているとして理解している。疑似畦畔Bの間隔は広いもので3mほどだが2m前後のものも多く、その間には低いウネ列の高まりが1.0～1.5mの間隔で見出される。第13次調査での検出状況も幅1.0m強の間隔で高まり列が確認されており、疑似畦畔Bの中に2列存在するものと3列のものがある。1.0～1.5mという幅は、クワ・スキを用いた耕起作業の作業幅（単位）とすれば、畦畔と平行の耕起作業が行われ、作業単位の境部分がわずかな高まり（あるいは段差）として残されたものの可能性がある。

曲金北遺跡第13次調査の第2検出面は、平面形態としては鷹ノ道遺跡第7次・曲金北遺跡第10次例に近く、断面形態（下層土の高まりに高低差が存在）からは上土遺跡第2次・曲金北遺跡第6次例に近い。今回の調査例は、両者を結びつけて理解する上で重要な成果と見える。

注1) 静岡県歴史文化財調査研究所が実施した石見石において、美知砂岩層は検出されており、前述図形の矢部藩氏により、水田南と美知砂岩層の位置が一致しない事柄についての考察が述べられている。

注3 右著論者によれば本書ではあまりに日本の差は見いだせない。

註3 水田面の配製法、地層の存在形式（これは地層を取り入れ、水田面と対峙するにする形式）の段階で、地層直下には沼澤作土が自然に露出する。（この段階では「うね状」例でも同様である。内部の張り下げを伴わなければ「大田区配法」の原型と認識する可能性もある。）残る耕作土を定量化すると、1度1畝に存在した水田面が反替したような下地層が露出される。

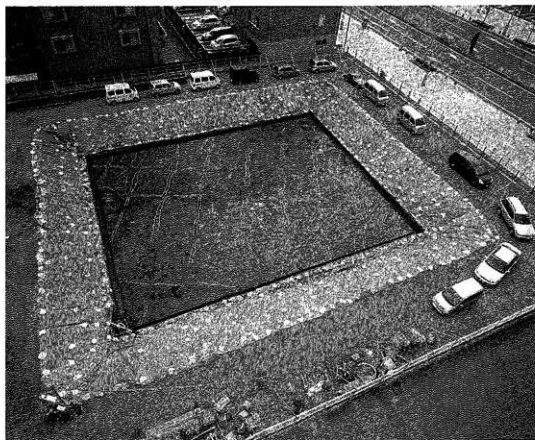
(注) 本図面の矢印は耕作土下位に、疑難雑草が残存しているということからは、次のような状況が考えられる。
①本圃は(奥・段上・小区西)は開墾に「戻る」状態に。変更されるものではなくある程度の期間は放置が要中とされている。

②本誌稿の定数は変更されるものの、刊行時に比べ裏紙作業は減ったため、下庫庫へ影響を及ぼしていない。

◎ 成極楽（愚役）し、難作を刊明した際に区別が要求されているが、上位本州の難作士と区別がつかない。



1 第1楼出面全景（北方上空から）

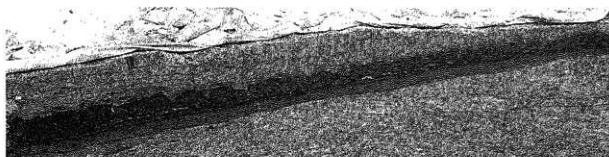


2 第2楼出面全景（北方上空から）

图版 2



1 調査区東壁土層断面



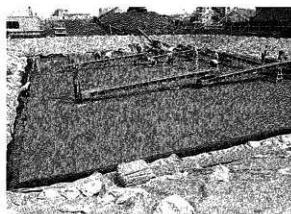
2 同上南端部



3 調査区南壁西半部



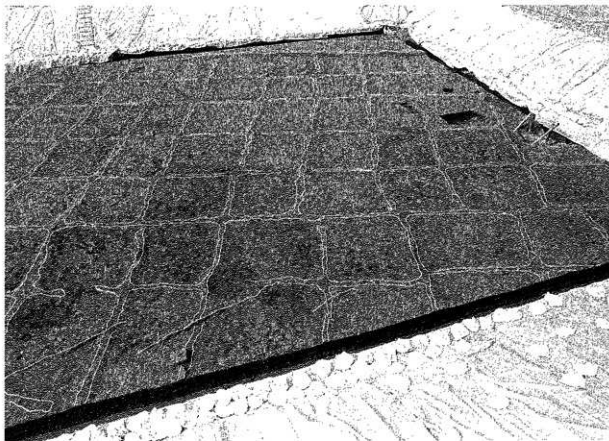
4 大畦畔SK101確認状況



5 第1検出面小畦畔検出作業

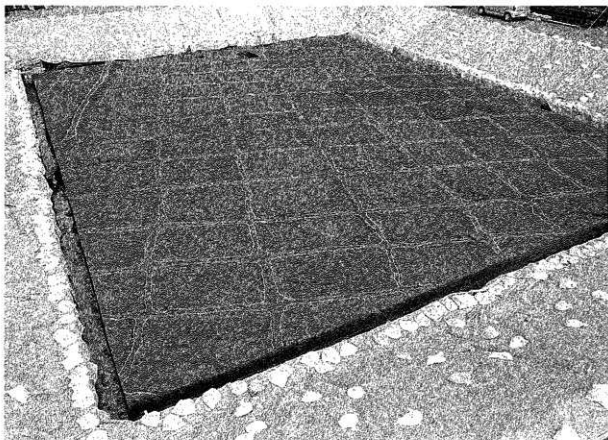


1 第1検出面 完掘状況（東方から）

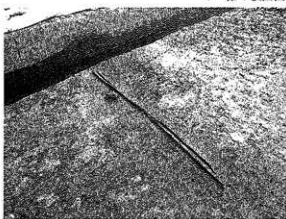


2 第1検出面 完掘状況（南方から）

図版 4



1 第1検出面 完掘状況（西方から）



2 SK101盛土内木製品 (W-7, W-8)



3 SK101盛土内木製品 (W-1)



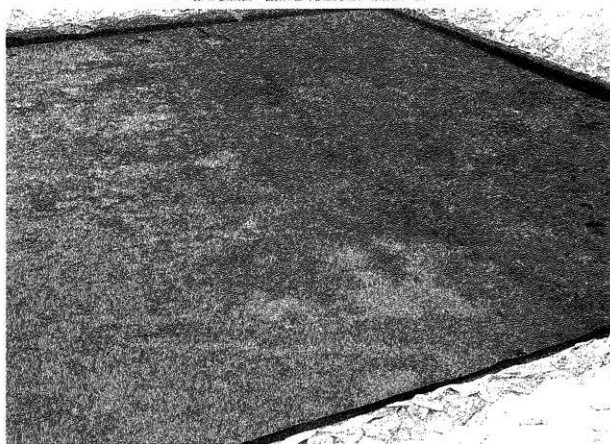
4 SK101盛土内木製品 (W-2, W-3)



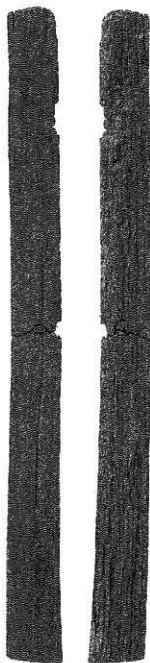
5 SK101盛土内木製品 (W-5)



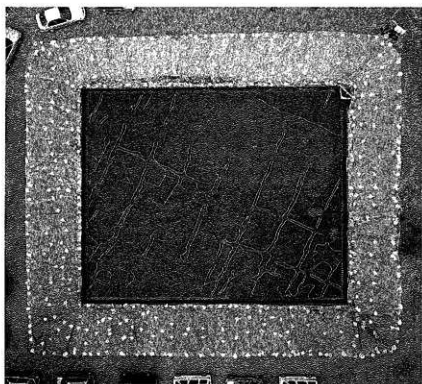
1 第2検出面 疑似畦畔検出状況（南方から）



2 同上（西方から）



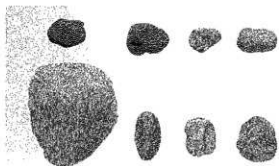
2 出土遺物（木製品）



1 第2検出面 完掘状況（上空から）



3 出土遺物（礫1～8）



4 出土遺物（礫9～16）

引用参考文献

- 文献1 1996 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 『曲金北遺跡(遺構編)』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第68集
 文献2 1997 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 『曲金北遺跡(遺物・考察編)』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第92集
 文献3 1998 中部電力株式会社・静岡市教育委員会 『曲金北遺跡-第4次発掘調査報告書-』 静岡市埋蔵文化財報告45
 文献4 2000 静岡市教育委員会 「(4)曲金北遺跡(第6次)」『ふちゅへる 8』平成10年度静岡市文化財年報
 文献5 2002 静岡市教育委員会 『長沼遺跡第2次発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財調査報告58
 文献6 2004 静岡市教育委員会 「7.曲金北遺跡(第6次調査)」『ふちゅへる 12』平成14年度静岡市文化財年報
 文献7 2005 静岡市教育委員会 「(6)曲金北遺跡(第7次調査)」『ふちゅへる 13』平成15年度静岡市文化財年報
 文献8 2007 静岡市教育委員会 「(4)曲金北遺跡(第10次調査)」『ふちゅへる 15』平成17年度静岡市文化財年報
 文献9 2007 静岡市教育委員会 「第14章 曲金北遺跡確認調査報告書」『静岡市内遺跡群発掘調査報告書(平成18年度)』
 文献10 2008 静岡市 「曲金北遺跡(第11次調査)」『ふちゅへる 16』平成18年度静岡市文化財年報
 文献11 2008 静岡市教育委員会 「(4)曲金北遺跡(第13次調査)」『ふちゅへる 17』平成19年度静岡市文化財年報
 文献12 2008 静岡市教育委員会 『曲金北遺跡 第2・3・5・9次発掘調査報告書』
 文献13 2008 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 『曲金北遺跡～古墳時代的小区画水田跡～』平成19年度現地説明会資料
 文献14 1983 加藤芳郎 『有東遺跡をめぐる地形・地質的背景』『有東遺跡1』静岡県文化財調査報告書第28集 静岡県教育委員会
 文献15 1989 静岡市教育委員会 『有東橋子遺跡Ⅱ 第3次発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財調査報告21
 文献16 1996 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 『土土遺跡(立石地区)Ⅰ』(遺構編) 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第77集
 文献17 1996 静岡県 『静岡県史』第6編 2 自然災害史
 文献18 1990 岡村彦 「(2)登呂遺跡水田跡の土層」『静岡市立登呂博物館報(第1号)』静岡市立登呂博物館
 文献19 1987 仙台市教育委員会 『宮沢～宮沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告第98集

報告書抄録

ふりがな	まがりかねきたいせき							
番 名	曲金北遺跡							
副 書 名	第13次発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	静岡市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号								
編 著 者 名	鈴木悦之							
編 集 校 関	静岡市教育委員会							
所 在 地	〒420-8602 静岡県静岡市葵区追手町5番1号 054-221-1085							
発行年月日	西暦 2009年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
自 金 北 遺 跡	静岡市駿河区曲金六丁目	22201	B59	34° 59' 2"	138° 24' 57"	2007.10.01 2007.11.16	500㎡	集合住宅の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	特記事項				
自 金 北 遺 跡	生産域	弥生～古墳	畦畔	木製品				

静岡市埋蔵文化財発掘調査報告

曲金北遺跡

第13次発掘調査報告書

平成21年3月31日

編 集 静岡市教育委員会
 発 行

印 刷 緑 東 海 美 術 社

